様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　６ 月 １７ 日現在

機関番号：３２６１７
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2020
課題番号：１７Ｋ０２１２５

研究課題名（和文）戦争と観光――戦前期「満洲」における戦跡ツーリズムに関する歴史的研究

研究課題名（英文）War and Tourism: A Historical Study on Battlefield Tourism in Manchuria during the Prewar Period

研究代表者
高　媛（KO, EN）

駒澤大学・グローバル・メディア・スタディーズ学部・教授

研究者番号：２０４５３５６６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、戦前期満洲における戦跡保存の過程と戦跡観光化の実態を明らかにするとともに、同時代の中国人社会に与えた影響や、中国人が日本の戦跡旅行に向けるまなざしを考察することで、観光という場で繰り広げられた日中間の相互作用のダイナミズムを描き出した。研究成果としては、第一に、日露戦争と満洲事変で生み出された満洲戦跡の保存過程を把握することができたことである。第二に、戦跡の観光化を牽引する満鉄や大連都市交通株式会社などの取り組みと戦跡観光の実態を明らかにしたことである。第三に、戦跡用地の買収や戦跡の観光化をめぐる日中双方の対立や攻防といった日中間の交渉の様相を浮き彫りにしたことである。

研究成果の学術的意義や社会的意義
研究成果の学術的意義は、日露戦争から第二次世界大戦にかけての満洲戦跡の保存や観光化の歴史的変容を辿ると同時に、日中双方の観光客のまなざしの交錯の検証を通しながら、通時的・共時的という二つのアプローチにより、満洲地域での戦跡ツーリズム研究の事例研究を提供したことである。
研究成果の社会的意義は、満洲戦跡ツーリズム史を明らかにするだけにとどまらず、今日まで続く日中両国における満洲認識の齟齬（中国では日本による満洲への侵略を強調し、日本の一部の人は日本による満洲開発の成果を強調する）を解きほぐし、近代東アジア社会における戦争の記憶の形成過程の複雑性と多義性を理解する糸口を提示したことである。

研究成果の概要（英文）：This study not only clarified the process of battlefield preservation and the actual state of battlefield tourism in Manchuria during the prewar period, but also drew out the dynamism of the interaction between China and Japan that took place in the field of tourism by examining the impact of the war on Chinese society during the same period and how Chinese people looked upon Japanese battlefield tourism. First, I was able to understand the preservation process of the Manchurian battle sites that remained following the Russo-Japanese War and the Manchurian Incident. Secondly, I clarified the efforts of the Manchurian Railway Company and the Dairen Urban Transport Corporation, which were leading the way in battlefield tourism, and the actual situation. Thirdly, I was able to shed light on the confrontational nature of the negotiations between Japan and China regarding the acquisition of land for war sites and how war sites should be turned into tourist destinations.

研究分野：観光史

キーワード：満洲　戦跡　観光　ツーリズム　戦争　帝国　植民地

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

観光学における戦跡ツーリズム研究は、戦争や災害などの悲劇にまつわる場所をめぐる「ダークツーリズム」の重要なテーマの一つとして、1990 年代以降に活発となった。代表的な研究として、ゲティスバーグや真珠湾などアメリカの主要戦跡を訪れた観光客の多様な反応を分析する Edward Tabor Linenthaの『聖なる地』[Sacred Ground, University of Illinois Press,1991]や、第一次世界大戦後の戦跡観光を通してイギリス人などの戦争の記憶の形成を考察する David W.Lloyd の『戦跡ツーリズム』[Battlefield Tourism,Berg,1998]などが挙げられる。

日本国内では、ジョージ・L・モッセの『英霊――創られた世界大戦の記憶』[宮武実知子訳、柏書房、2002]や、ピエール・ノラ編『記憶の場』[谷川稔監訳、岩波書店、2002～2003]に触発され、歴史学や民俗学の分野において、戦争記念碑や慰霊・追悼の場に関する研究が2000 年代以降 発展しつつある。なかでも、戦跡ツーリズムに着目した研究として、第二次世界大戦の激戦地・グアムにおける慰霊観光と楽園開発の矛盾を描く『グアムと日本人』[山口誠、岩波書店、2007] や、戦後における沖縄への慰霊巡拝団の活動を考察した『死者たちの戦後誌』[北村毅、御茶の水書房、2009]などが現れている。

一方、「満洲」（現・中国東北地方）における戦跡ツーリズムに関する研究蓄積は少ないものの、いくつか分析例がある。たとえば、荒山正彦は旅行年鑑などに描かれた日露戦跡・旅順のイメージを概観している[「戦跡 とノスタルジアのあいだに」、『人文論究』50(4)、2001]。また、一ノ瀬俊也は旅行案内書などを 手がかりに、旅順をめぐる語りは、大正初期までに加え、第一次世界大戦後及び満洲事変後の三つの時代でそれぞれ変化したことを指摘している[「戦跡と語り」、関沢まゆみ編『戦争記憶論』昭和堂、2010] 。ほかに、1939 年の女子高等師範学校の旅行記録を取り上げたケーススタディーもある[長志珠絵 「『満洲』ツーリズムと学校・帝国空間・戦場」、駒込武・橋本伸也編『帝国と学校』昭和堂、2007]。

これらの研究は、戦跡の表象や観光客の反応分析においてそれぞれ有効な論点が見出されるが、戦跡観光の創出過程を描き出す歴史的・体系的な叙述は十分に行われていない。さらに、先行研究のほとんどは日本語の資料だけに依拠しているため、観光の場における接触・浸透・攻防といった日中間の交渉の諸相については深く論じられてこなかった。

このような研究背景のもと、本研究は「満洲戦跡ツーリズム」に光を当て、「戦争」と「観光」というキーワードを軸に、満洲戦跡観光が出現し変容を遂げた歴史を明らかにするとともに、その創出過程にみられる日本人／中国人の二者の間に生じる多様な交渉の様相を考察していく、という着想に至ったのである。

２．研究の目的

本研究は、日清・日露戦争から満洲事変を通じて幾度も激戦が繰り広げられた「満洲」での戦跡ツーリズムに焦点を当て、日本語と中国語の両言語で書かれた公文書や観光ガイドブック、新聞雑誌記事、旅行記及び未刊行の旅行日記などの資料を手がかりに、日露戦争から第二次世界大戦に至るまでの戦跡観光の歴史的変遷過程を解明するとともに、日本人／中国人の二者が「出会う」戦跡の場に発生する重層的で多声的な状況を浮き彫りにすることを目的とする。

最終的には、戦跡ツーリズムが満洲イメージや戦争の記憶の形成に寄与した影響を考察し、今日まで続く日中両国における満洲認識の齟齬（中国では日本による満洲への侵略を強調し、日本の一部の人は日本による満洲開発の成果を強調する）を解きほぐすための一つの指標を提示することを目指す。

３．研究の方法

本研究は、戦前期満洲における戦跡ツーリズムの創出過程を歴史的文脈とともに解明し、日本 人／中国人の二者が「出会う」戦跡の場に発生する、重層的で多声的な状況を浮き彫りにする。

具体的には、以下の方法で研究を進めてきた。

（1）満洲戦跡保存会や忠霊顕彰会などの戦跡保存団体の活動への考察を通して、日露戦争と満洲事変で生み出された満洲戦跡の保存過程を辿る。

（2）満鉄や大連都市交通株式会社の刊行物などを手がかりに、観光インフラの整備や戦跡観光案内の実態を明らかにする。

（3）日本語・中国語で書かれた公文書や新聞雑誌記事などを用いて、日本人／中国人の

二者間のまなざしの交錯に加え、戦跡用地の買収や戦蹟の観光化をめぐる日中間の交渉の様相を考察する。

４．研究成果

本研究は、戦前期満洲における戦跡保存の過程と戦跡観光化の実態を明らかにするとともに、同時代の中国人社会に与えた影響や、中国人が日本の戦跡旅行に向けるまなざしを考察することで、観光という場で繰り広げられた日中間の相互作用のダイナミズムを描き出した。

（1）満洲戦跡の保存過程

日露戦争の激戦地として知られる満洲（現・中国東北地方）は、日露戦争終結の翌年（1906年）から、早くも戦跡旅行の目的地として注目を浴びるようになった。この年の 7 月、東京大阪両朝日新聞の主催による満韓巡遊旅行や、全国の中等学校以上の学生と教職員及び全国の小学校教員などを対象とする陸軍省・文部省共催の満洲合同修学旅行が大々的に催され、満洲旅行は「一世の流行」となった。しかし、戦後間もないこの時期の旅行では、旅行者に慰霊、或は見学の場として用意できたのは、南山の鎮魂碑と昭忠碑、遼陽の招魂社、奉天の忠魂碑及び旅順の戦利品記念館など数ヶ所だけであった。

1913 年 11 月、関東都督府都督・福島安正を会長とする「満洲戦跡保存会」が関東都督府民政部内に設立された。経費は 50 万円を計上し、事業範囲は戦跡記念碑の建立、水師営会見所などの保存や記念標識の建設、旅順戦跡監視家屋の建設、旅順戦跡道路の修築及び開鑿、旅順戦跡維持工事、各種戦跡模型などの製作、海軍方面事歴の表彰、戦跡記念館の建設、白玉神社殿宇の建設、戦闘地図及び戦跡案内記の発行などの多岐に亘る。満洲戦跡保存会の事業が進むにつれ、旅順をはじめ、関東州外の満鉄沿線に点在した日露戦争の戦跡で次々と記念碑や記念標が建てられ、戦跡旅行のインフラは急速に整備されるようになった。

満洲事変（1931 年 9 月 18 日）の勃発後、奉天の北大営をはじめ、新京の寛城子、南嶺、北満の嫩江、大興、昂々渓といった満洲事変ゆかりの激戦地も、満洲旅行のルートに新たに組み込まれるようになる。満洲事変の翌年、早くも『満洲事変長春新戦蹟案内』（満鉄）や『満蒙戦跡慰問視察便覧』（満蒙時局旅行案内社）など、新戦跡を紹介するリーフレットやガイドブックが刊行された。

1935 年 4 月、関東軍司令部内に財団法人「忠霊顕彰会」が発足した。同会は 1923 年に関東軍司令部の中に設置された南満納骨祠保存会の事業の一切を継承するとともに、忠霊塔建設の助成、その維持管理、祭祀を行うほか、重要な戦跡の保存事業を兼業した。忠霊顕彰会のもとで、新たに満洲事変の英霊を合祀するため、新京、哈爾濱、チチハル、承徳、ハイラルに相次いで忠霊塔が建立された。満洲事変前に旅順、大連、遼陽、奉天、安東の各地に建設されていた日露戦争関係の忠霊塔と合せ、1942 年現在、忠霊顕彰会は計 10 ヶ所の忠霊塔を管理している。これらの忠霊塔は絵葉書やガイドブックにも登場し、満洲に来た日本人旅行者が必ず参拝する名所の一つとなった。

（2）満鉄や大連都市交通株式会社の取り組みと戦跡観光の実態

日露戦争の戦跡は旅順以外に、満鉄の鉄道沿線にも広く分布しているため、満鉄は早くから駅構内や鉄道沿いなどに戦跡案内の標識を立てたりするなど、戦跡を観光資源の目玉として、宣伝に力を注いできた。1929 年に発行された満鉄のガイドブック『南満洲鉄道旅行案内』では、「戦場満洲」の項目が設けられ、「我等が父祖の悪戦苦闘せし跡を弔ひその人力に絶したる業蹟を三思すれば満洲の野に山に昔ながらのものは一木一石たりとも深き感慨なくしては看過し得ぬであらう」と満洲戦跡旅行の意義が訴えられている。同書によると、1927 年 5 月現在、満鉄沿線の戦跡案内の標識数は、駅構内 61 ヶ所、碑に至る道路沿い 27 ヶ所、鉄道沿い 95 ヶ所に達している。また、日露戦跡や満洲事変の戦跡は車窓から容易に瞥見できる特徴から、満鉄は大人数の団体旅行者のために、車掌が直に、或は車内放送を通して沿線の戦跡説明を行うサービスも行っていた。

一方、満洲国建国後の 1932 年 5 月、満鉄の傍系会社・南満洲電気株式会社（1926 年に設立、1936 年に大連都市交通株式会社と改称）が旅順戦跡バスの運行を開始した。これを皮切りに、奉天、哈爾濱、撫順、新京、大連の六大都市に相次いで観光バスが発足した。旅順だけは「観光バス」ではなく「戦跡バス」や「戦跡巡拝バス」という名で貫き、案内役もバスガイドならぬ男性の運転手が兼務する形で行われた。また、旅順以外の 5 つの都市も、観光バスのコースに必ず戦跡や忠霊塔が組み込まれていた。1940 年、戦時下に実施されたガソリン消費の統制によって、日本国内の遊覧バスはすべて運行停止になった。それに対し、戦跡を取り入れた満洲の観光バスはむしろ時局に相応しい事業と重宝され、大連を除く 5 つ

の都市の観光バスは、1943 から 1944 年まで存続することができた。

（3）日中間の交渉の様相

日本人による満洲戦跡の積極的な保存や観光化は、中国人社会から少なからぬ反発を引き起こした。1927 年、奉天郊外の于洪屯で日本の軍人が中国側の許可を得ずに戦跡記念碑の建立を強行したことで、現地の村民から訴えられた事件が起こった。また、1930 年に遼陽での戦跡記念碑の建設に関し、中国側は工事の差し止めを求め、駐遼陽日本領事館宛に抗議文を送った出来事もあった。さらに、建てられた戦跡記念碑は、現地の中国人によって破壊されたり倒されたりするなど、戦跡をめぐる衝突は絶えなかった。

一方、満洲に住んでいる中国人旅行者や満洲を訪れた中国本土からの旅行者は、駅構内や鉄道沿線に点在した日露戦跡の案内標識への反感を露わにしたり、市街地に聳え立つ忠霊塔などを屈辱的な気持ちで眺めたりしていた。つまり、満洲の戦跡ツーリズムは、日中の衝突を顕在化する政治的な営みであったのである。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 高媛	４．巻 28
２．論文標題 「満鉄の観光映画――『内鮮満周遊の旅・満洲篇』（1937年）を中心に」	５．発行年 2018年
３．雑誌名 『旅の文化研究所研究報告』	６．最初と最後の頁 43-65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　1件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 高媛
２．発表標題 戦前における日本人学生の満洲旅行
３．学会等名 帝国日本の鉄道と観光
４．発表年 2019年

１．発表者名 高　媛
２．発表標題 「満鉄の観光映画――『内鮮満周遊の旅・満洲篇』（1937年）を中心に
３．学会等名 日本植民地研究会（招待講演）
４．発表年 2017年

〔図書〕　計4件

１．著者名 高媛、田島奈都子、岩間一弘	４．発行年 2019年
２．出版社 不二出版	５．総ページ数 236
３．書名 『旅行満洲』解説・総目次・索引	

1．著者名 日本植民地研究会、須永徳武、谷ヶ城秀吉、駒込 武、松田利彦、加藤圭木、竹内祐介、平山 勉、清水美里、林采成、李海訓、安達宏昭、大浜郁子、湊 照宏、金富子、都留俊太郎、細谷 亨、千住 一、古川宣子、高 嫄、ほか	4．発行年 2018年
2．出版社 岩波書店	5．総ページ数 320
3．書名 日本植民地研究の論点	

1．著者名 田中 祐介、柿本 真代、河内 聡子、新藤 雄介、中村 江里、川勝 麻里、大野 ロベルト、中野 綾子、康潤伊、堤 ひろゆき、徳山 倫子、磯部 敦、高　嫄、大岡 響子、宮田 奈奈、西田 昌之、松薗 斉、島 利栄子	4．発行年 2018年
2．出版社 笠間書院	5．総ページ数 568
3．書名 日記文化から近代日本を問う	

1．著者名 旅の文化研究所、神崎宣武、髙木大祐、山本志乃、中村茂生、松田睦彦、高嫄、三輪主彦	4．発行年 2020年
2．出版社 七月社	5．総ページ数 288
3．書名 「小さな鉄道」の記憶	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関